

令和 5 年 10 月 23 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01165

研究課題名（和文）南アジアにおける女性芸能者の特質とスティグマに関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Research on Professional Women in South Asian Music and Performance

研究代表者

田森 雅一（Tamori, Masakazu）

愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：10592454

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間の5年間（コロナによる延長2年間を含む）において、合計13回の研究会を開催した（単独11回、国立民族学博物館との共同研究会2回）。また、研究代表及び共同研究者4名全員が南アジアでの海外調査（北インド2名、南インド1名、パキスタン1名）を完了した。このような研究会と現地調査の関連成果の一部として図書9点・論文2点を出版し、日本文化人類学会・日本南アジア学会・東洋音楽学会等で11件の口頭発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで南アジアにおける女性芸能者の研究は、ヒンドゥー寺院におけるデーヴァダーシの社会歴史的研究が中心であり、北インド/パキスタンを含む広域の具体事例に基づく文化人類学的・民族音楽学的調査研究は十分に行われてこなかった。本研究では宗教文化と結びついた地域性を踏まえつつ、それぞれの専門家が分担して現地調査を行ない、各地域での花街や音楽芸能コミュニティにおける女性芸能者の現況・実態の一端を明らかにできたことは大きな収穫であった。それにより、南アジア的現象としての女性芸能者の特質とスティグマのあり方について広域的に比較検討するための基礎作業が行われたという点において学術的意義を有すると考える。

研究成果の概要（英文）：During five years (including extension two years by the corona) of the study period, we held 13 times of workshops in total (two times of joint workshops with National Museum of Ethnology). In addition, all the study representative and three research associates completed an overseas investigation (North India, South India and Pakistan) in South Asia. We contributed to the publication of nine books and two articles as some allied result of such a workshop and field work, and performed 11 presentations in The Japanese Society of Cultural Anthropology, The Japanese Association for South Asian Studies, The Society for Research in Asiatic Music and so on.

研究分野：文化人類学

キーワード：女性芸能者 南アジア インド ジェンダー 音楽 舞踊 売春 ポストコロナル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

インドの伝統的音楽芸能文化は近代社会のなかで大きく変化してきている。その変化は、北インドにおいては、宮廷社会（藩王・領主制）の終焉とサロン文化（花柳界・花街）の衰退、独立後の国民文化としての古典音楽教育やラジオ放送における古典音楽プログラムの重点化といった文化政策の推進と無関係ではない。例えば独立直後のラジオ放送においては、女性歌手は「売春」と結びつくタワーイフ (*tawa'if* 芸妓) の亜流と見なされ、放送対象の人選から除外されていたのである。このような流れは、19世紀末からの南インドにおける寺院付き踊り子の問題ともリンクしている。彼女たちはデーヴァダーシ（神 *deva* の女僕 *dāsi*）と呼ばれ、ヒンドゥー寺院において舞踊を奉納していたが、通常の婚姻形態をとらずパトロン男性と関係をもったことから、英国流の貞操観念を内面化したヒンドゥー・エリート層などから「売春婦」の烙印が押されるようになっていった。しかし、1920年代ころから、英国からの独立を目的としたナショナリズムの高揚を背景として、古典音楽・舞踊の確立の必要性が議論され、前近代的な因習への反対運動によって消滅の危機に瀕した芸術伝統を「救済する」という修辞のもとに、音楽舞踊界の根本的な構造改革が試みられた。その一方、高位カーストが中心となる音楽舞踊界の形成過程において、デーヴァダーシ家系や他の職能カーストの演奏家たちは次第に除外されるようになっていったのである。このように、寺院舞踊への反対運動が高位カーストによる伝統音楽舞踊の再興運動に繋がっていく状況についての社会歴史的研究の蓄積はあるが、インド独立後の国民文化形成期の当初から「スティグマ」を背負ったデーヴァダーシやタワーイフたち、またひと括りにされてきた多様な女性芸能者たちとその関係コミュニティの実態に着目した研究は希少であり、南アジアにおけるジェンダー研究の蓄積を踏まえた文化人類学や民族音楽学の視点からも明らかにされるべきである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、インドの音楽芸能文化の興隆・再構築に果たしたデーヴァダーシやタワーイフなどの女性芸能者とそのコミュニティの変化、彼女たちとの結びつきが「スティグマ」となる師匠や音楽家たちのアイデンティティ形成や適応戦略のあり方の近代性・再帰性について具体的かつ実証的に示すことである。そのため、女性芸能者とその師匠・伴奏者たちが育んで来たインドを中心とする南アジアの音楽芸能文化の特質と、南インドと北インド・パキスタンで異なる女性芸能者の社会文化的・宗教的な位置づけを明らかにしつつ、主として英領インド帝国期に形成された「女性芸能者」と「遊女（売春婦）」に関する社会通念が今日の芸能世界に与えている影響とポストコロニアルな状況の中での変化の両方について見据えた研究を行なう。より具体的には、英領インド帝国期の国勢調査・民族誌・地誌などの記述分析に加え、各研究者が専門とする宗教・地域・カースト/コミュニティの女性芸能者の実態を明らかにしながら、南アジアにおける女性芸能者の特質とエージェンシーについて検討した。

## 3. 研究の方法

研究代表者と分担研究者、研究協力者（旧連携研究者）2名の共同研究者4名による研究会を年2～3回開催し、南アジアにおける女性芸能者の特質を抽出するため関連先行研究論文の購読・検討及び外部講師を招いての発表・検討を行う。また、共同研究者各自が南アジア（北インド2名、南インド1名、パキスタン1名）での海外調査を行い、その成果を研究会及び外部との共同研究会や学会等で発表・検討する。特に本研究では、プレコロニアル～コロニアル～ポストコロニアルという時代性、南インド（ヒンドゥー）～北インド（ヒンドゥーとムスリム）～パキスタン（ムスリム）という宗教文化と結びついた地域性やジェンダー研究（カースト秩序とジェンダー規範、女性をめぐる名誉と恥、婚姻・夫婦・男女間に関する宗教社会通念や慣習、セクシュアリティに関する議論など）を踏まえつつ、それぞれの地域の専門家/共同研究員が分担して文献資料調査及びフィールドワーク（現地調査）を行なうと同時に、それらの報告については研究会を開催して共通の視点から検討する。それにより、南アジア的現象としての女性芸能者の特質と「スティグマ」のあり方について広域的に検討を行う。また、音楽芸能者が文化史の枠組みのなかで語られる際には、音楽・舞踊の内容にまで踏み込んだものは少なかった。そこで、本研究においては、共同研究者4名の多くが音楽や舞踊を実践的に学習した経験者であることから、女性芸能者や伴奏者たちの技芸や学習方法についても研究対象とした。

#### 4. 研究成果

研究期間の5年間（コロナによる延長2年間を含む）において、合計13回の研究会を開催した（単独11回、国立民族学博物館との共同研究会2回）。また、研究代表及び共同研究者4名全員が予定していた海外調査を完了した。研究会/先行研究分析では、南アジアにおける女性芸能者の特質について注目されたが、その前提として南アジアにおけるジェンダー研究と女性表象がベースの議論となった。例えば、ヒンドゥー教における家父長制度や女神信仰において、女性は男性によってコントロールされる存在として表象され、よき妻、よき母としての役割が強調されてきた。その反面、女性が未婚であることがスティグマとなる社会において、家父長制度の枠外で生きる女性芸能者は英領インド帝国期におけるヴィクトリア朝の道德規範の浸透と相まって「売春婦」と同一視され、その技芸が過小評価されていくプロセスや地域・コミュニティによって異なる女性芸能者の動向・現状に関する調査研究は希少であることが明らかになった。そのような共通認識のもとに行われたのが、共同研究者4名による現地調査である。

研究代表者の田森雅一は、北インドのかつての花街/今日の赤線地帯（インドの首都デリー及びラージャスターン州の州都ジャイプル）の調査を行った。その結果、デリーのGBロードのような娼婦を中心とする売春街へと変貌を遂げた地域と、ジャイプルのチャンドポールのような伝統的芸妓が中心となる花街の雰囲気を持する地域があることがわかった。ジャイプルでのタワーイフへのインタビュー調査から、彼女たちは女系的コミュニティを形成していること、「おもてなし」を生業とするムジュラー・パフォーマー（芸妓）と技芸を持たない売春婦（娼妓）を区別して自分たちを前者と位置付けていること、その一方で今日の一見の訪問者は自分たちの技芸ではなく、自分たちの踊る身体を見に来ていることを自覚しており、自分たちが後者に位置付けられることにスティグマを感じていることなどが明らかになった。また、彼女たちに音楽を教え、伴奏を行ってきたムスリムの伝統的音楽カーストの楽士たちは、今日ではタワーイフ及び彼女たちのコミュニティとの歴史的関係に口を閉ざす傾向にあることがわかった。

共同研究者（分担研究者）の寺田吉孝は、南インドのタミルナドゥ州の州都チェンナイで、伝統的な音楽舞踊カーストであるイサイ・ヴェーラーラルの調査を行なった。その結果、彼らのコミュニティでは、売春のスティグマに対する恐怖心がいまだに存在し、舞踊に関心を示す女性は家族からサポートを得られない場合が多いこと。また、主流舞踊界の反応は二極化しており、メディア上ではカースト差別の存在を完全に否定する一方で、差別批判を行わない職能カースト出身の舞踊家を厚遇することで、差別に対する批判が妥当でないことを示す例が見られることなどを明らかにした。

共同研究者（旧連携研究者）の岩谷彩子は、北西インドのラージャスターン州を中心にヘビ使いを生業としてきた移動民カールベリヤーの女性たちの舞踊に関する調査を行った。彼女たちの「カルベリア・ダンス」は、ヘビを見せ物にする行為が困難になった1970年代以降に観光資源として注目された新しい踊りであり、21世紀に入ってからユネスコの無形文化遺産に登録されることになるが、その独特な舞踊形成過程・創造性とコミュニティの女性が中心となることで生じるスティグマの両方について探究した。

共同研究者（旧連携研究者）の村山和之は、パキスタンの古都ラホールの花街/赤線地帯であるヒーラマンディーの現状について調査した。この地域の音楽舞踊と女性芸能者（タワーイフ/カンジャル）に関しては、フォーギア・サイードによるすぐれた民族誌（翻訳2010年）があるが、その後の同地区の状況に関する学術的報告はない。調査者は、かつてタワーイフが客を誘っていたバルコニーに彼女たちの姿はなく、舞踊や音楽を楽しもうとする客の姿もなく、花街という技芸で客を魅惑する社交場・歓楽街としての「場所」が空洞化し、専門のウェブサイトやソーシャルメディアで連絡を取った者たちの刹那的な「場所」となっていることを明らかにした。

このような研究会と現地調査の関連成果の一部として図書9点・論文2点を出版し、日本文化人類学会・日本南アジア学会・東洋音楽学会等で11件の口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田森雅一	4. 巻 46
2. 論文標題 環流現象と音楽伝統の変容 インドとフランスを結ぶ再帰的グローカル化の諸相	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 文明21	6. 最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田森雅一	4. 巻 166
2. 論文標題 サロード誕生の秘密	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊民族学	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田森雅一
2. 発表標題 グローバルゼーションとライフ・ポリティクス 北西インド・ムスリム世襲楽士カーストの近現代
3. 学会等名 中部人類学談話会例会（2023年2月23日、中京大学）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田森雅一
2. 発表標題 インド音楽世界における音楽家と演奏記録の統合的データベース構築とその可能性（共同発表）
3. 学会等名 東洋音楽学会・第73回大会（2022年11月13日、国際基督教大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田森雅一
2. 発表標題 南アジアの花街における女性芸能者とその社会的世界 北インド・ラージャスターンの事例を中心に
3. 学会等名 日本文化人類学会・第56回研究大会(2022年6月5日、明治大学)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩谷彩子
2. 発表標題 インドにおける女性芸能者の社会的周縁性と創造 カルペリア・ダンスの事例より
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会(2020年10月4日、京都大学)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺田 吉孝
2. 発表標題 Caste and South Indian Music: Experiences from the 1980s and 1990s
3. 学会等名 UCLA Center for India and South Asia(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田森雅一
2. 発表標題 英領インド期の民族誌における音楽芸能カーストの結晶化とその余波
3. 学会等名 日本文化人類学会・第53回研究大会(2019年6月2日、東北大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田森雅一
2. 発表標題 グローバル化とポリティクス：ラージャスターンのムスリム楽士の事例
3. 学会等名 南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点・合同研究会（2019年7月27日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田森雅一
2. 発表標題 時代を駆け抜けた二人のインド女性芸能者の近代
3. 学会等名 東洋音楽学会・第70回大会（2019年11月17日、京都市立芸術大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 村山和之
2. 発表標題 パキスタンにおける女性パフォーマーについてー 歌手と役者とダンサーと
3. 学会等名 南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点・音楽芸能班共同研究会（2019年22月7日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩谷彩子
2. 発表標題 民俗舞踊とワールド・ダンスのはざままで ディアスポラ化するカルベリア・ダンサーたち
3. 学会等名 南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点・音楽芸能班研究会（2019年12月7日）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩谷彩子
2. 発表標題 へビがもたらす感覚変容 カールペーリヤーの巡回舞踊とその生活世界
3. 学会等名 日本南アジア学会記念連続シンポジウム (2018年10月28日、京都大学)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 田森雅一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 南アジア地域研究・国立民族学博物館拠点 (MINDAS Series of Working Papers No.5)	5. 総ページ数 43
3. 書名 近現代インドにおける音楽伝統と社会的レジリエンス ラージャスターン世襲楽師コミュニティの民族誌に向けて	

1. 著者名 田森雅一他 (三尾稔編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 南アジアの新しい波 下巻 「われわれのカーストをめぐる再帰的多声 ムスリム世襲楽師たちの言説空間とライフ・ポリティクス」	

1. 著者名 岩谷彩子、石井美保、金谷美和、河西瑛里子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 官能の人類学	

1. 著者名 岩谷彩子 (上羽陽子、金谷美和編著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 132
3. 書名 躍動するインド世界の布 ( (分担執筆: 「変容する舞踊衣装 擬態するカールペーリヤー」他)	

1. 著者名 村山和之 (前田耕作、山内和也監修)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 416
3. 書名 アフガニスタンを知るための70章 (分担執筆: 「22章 アフガニスタン人の娯楽と芸能模様 - 演劇・音楽・舞踊について」	

1. 著者名 寺田吉孝他 (Sean Williams(ed.))	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 358
3. 書名 Musics of the World	

1. 著者名 寺田吉孝、田森雅一、村山和之他 (寺田吉孝、松川恭子編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 368
3. 書名 世界を環流する インド	



1. 著者名 Ursula Hemetek, Inna Naroditskaya and Terada Yoshitaka	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Osaka: National Museum of Ethnology	5. 総ページ数 306
3. 書名 Music and Marginalisation: Beyond the Minority-Majority Paradigm (Senri Ethnological Studies 105)	

1. 著者名 岩谷彩子、田中雅一、石井美保、山本達也他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 456
3. 書名 インド・剥き出しの世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>英領インド帝国期の音楽芸能カーストの結晶化とその余波 北インドのミラーシーとタワーイフを中心に  <a href="http://www.minpaku.jp/nihu/mindas/news/ev20181013ws_MT">www.minpaku.jp/nihu/mindas/news/ev20181013ws_MT</a></p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	寺田 吉孝  (Terada Yoshitaka)  (00290924)	国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授   (64401)	2023年3月に逝去

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岩谷 彩子  (Iwatani Ayako)  (90469205)	京都大学・人間・環境学研究科・教授    (14301)	
研究協力者	村山 和之  (Murayama Kazuyuki)  (80453968)	和光大学・表現学部・非常勤講師    (32688)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関